

37	直島町立直島小学校・直島中学校	23～25
----	-----------------	-------

平成 25 年度 研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

国際化時代に必要とされるコミュニケーション能力と国際感覚を育むため、小学校第3～6学年に教科として「外国語」を新設した場合の教育課程、指導及び評価方法並びに中学校教育課程との接続の在り方についての研究開発

2 研究の概要

小学校第3～6学年に新設する教科「外国語」を中心として、これまでに開発してきたカリキュラムをもとに、「総合的な学習の時間」と関連させた地域発信型単元の開発や小中連携を図りながら、「英語によるコミュニケーション能力や国際感覚の育成をめざす教科」としての在り方を探る。

具体的には、次の4点について研究する。

- ① 小学校における「外国語」のカリキュラム編成（「読むこと」「書くこと」の導入の時期と方法、「総合的な学習の時間」におけるふるさと学習と連携した地域発信型単元の開発と系統的な位置付けを含む）
- ② 中学校外国語との連携（中学校指導内容の一部を小学校へ移行するとともに、中学校における外国語の学習内容設定や言語活動の開発）
- ③ 評価規準の作成と評価方法
- ④ 指導力向上のための教員研修の在り方

アンケート調査や外部評価を踏まえて、将来の小中連携を含む英語教育の在り方について本校としての提言を行う。

3 研究の目的と仮説等

(1) 研究仮説

直島は、近年「現代アートの島」として世界の注目を集め、日常的にも国内外から多くの観光客を見掛けるようになってきている。そのような地域の中で、「ふるさと学習」などを通して、児童生徒は自分のふるさとを誇りに思い、大切にしようとする気持ちが育ってきている。これからのグローバル化社会を生きる児童生徒にとって、英語によるコミュニケーション能力の育成や、自他を尊重して共に生きようとする国際感覚の育成がますます重要になる。

直島小学校では、平成6年度から英語活動に取り組み、全学年で週1時間、担任とALTがティーム・ティーチングで指導してきた。また、平成14年度からは、高学年児童の英語活動への意欲低下という課題解決のため、直島小・中学校の外国語教育に「コミュニケーション能力と豊かな国際感覚の育成」という共通目標を設定し、5・4制を取り入れて小中連携を推進してきた。しかしながら、コミュニケーション能力育成のためには、小中9年間を通した「児童生徒の学びの連続性と教員の指導力」が課題であることが明らかになった。

この課題解決に向けて、小学校に、言語や異文化を自然に受け入れられる児童期に合った教科「外国語」を新設し、小中連携を踏まえた教科「外国語」の在り方を教育課程と教員研修の両面から探っていこうと考えた。これまでの英語活動における児童の意識調査や活動意欲の高さから、教科としてのスタートを小学校第3学年と設定し、次のように研究仮説を立てた。

(研究仮説)

教科としての外国語の開始時期を小学校第3学年からとし、新設教科「外国語」の教育課程、評価規準等を見据えて作成し実践することで、英語教育としての連続した学びが生まれ、児童・生徒のコミュニケーション能力が向上するだろう。

(2) 教育課程の特例

- 小学校第1・2学年に週1時間、「英語活動（学校裁量の時間）」を設定する。
- 小学校第3～6学年に、教科「外国語」を新設する。
(授業時数)
 - ・小学校第3・4学年 年間35時間（「総合的な学習の時間」から35時間を充てる）
 - ・小学校第5・6学年 年間70時間
(外国語活動35時間に、「総合的な学習の時間」から35時間を充てる)
- 中学校の外国語の時数を増やす。
(授業時数)
 - ・中学校第1～3学年 年間160時間
(現在の外国語140時間に、「総合的な学習の時間」から20時間を充てる)

4 研究内容

(1) 教育課程の内容

① 「英語活動」・「外国語」の開設

教科「外国語」の開始までに英語に親しむ活動として、小学校第1・2学年に「英語活動」を、小学校第3～6学年に、教科「外国語」を新設し、小学校第1～5学年を前期、小学校第6学年から中学校第3学年までを後期と位置付けた。

	前 期					後 期			
学年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年 (中1)	8年 (中2)	9年 (中3)
活動・教科	英語活動		教科「外国語」						
学習場所	小学校国際理解教室					中学校英語教室			
授業時間	35時間/年			70時間/年		160時間/年			
指導体制	担任・ALT				小外国語専科教員	中外国語教員	中学校外国語科教員		
					ALT	担任	ALT		
教科書	自作 Review Sheet		自作 Reading Book		Sunshine book 1 Sunshine book 2 Sunshine book 3 Power On I				
学習内容	聞くこと・話すこと					聞くこと・話すこと 読むこと・書くこと			
	読むこと・書くこと								

【前期と後期の接続】

第5・6学年において、授業時数、指導形態を揃え、教材・教具を継続活用した。

【小・中の接続】

第6学年と第7学年（中1）の初期に教科書を使った「リンクプログラム」を実施した。

② 「直島小・中学校外国語学習指導指針」の作成

中学校卒業段階で「自分たちのことや地域のことを話題にして英語でやりとりができる」生徒の姿をめざして、「直島小・中学校外国語学習指導指針」を作成した。

- ・「外国語」前期は、新たに学習目標と学習内容を作成した。

- ・「外国語」後期は、「外国語」前期での学習を考慮し、目標から「初歩的」を削除した。しかし、第6学年を後期のスタートと捉えているため、学習指導要領の内容を削減せず、学習指導要領の枠を超える内容を追加した。また、言語活動を多様にするために言語の使用場面の例や言語の働きの例を増やした。
- ・「英語活動」の学習内容を「聞くこと」「話すこと」の2領域の言語活動の観点から、教科「外国語」の学習内容を、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4領域の言語活動の観点から設定した。さらに、「直島小・中学校外国語学習指導指針」に基づき、CAN-DO リストを作成した。

【直島小・中学校外国語学習指導指針】

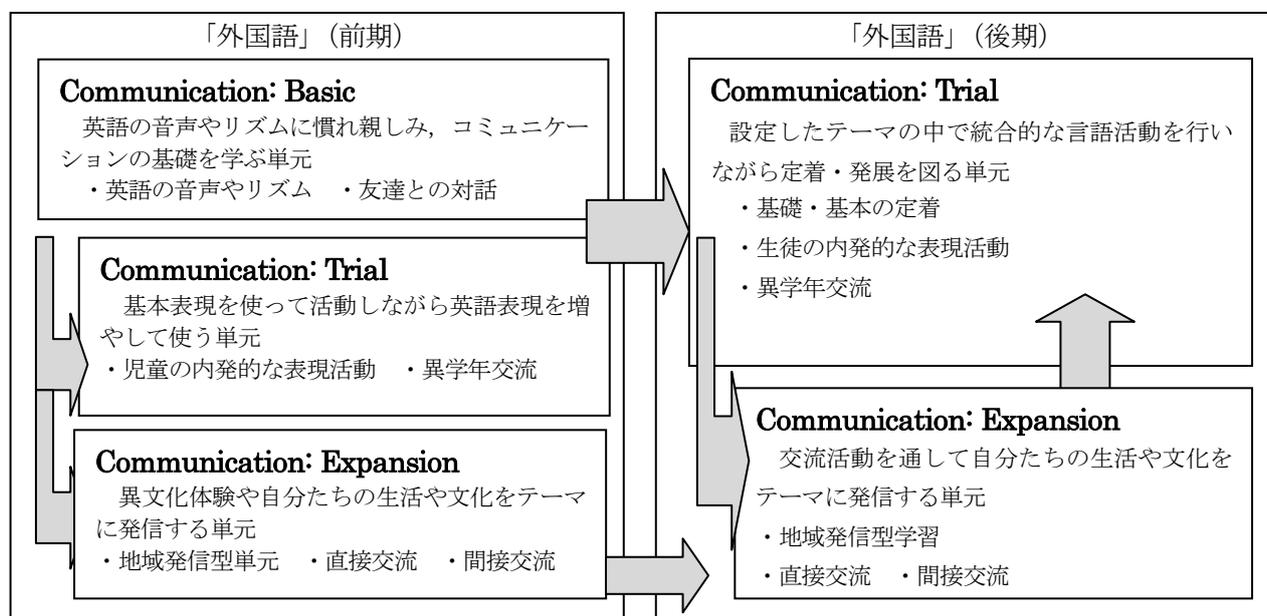
		前期（小学校第3～5学年）	後期（小学校第6学年～中学校第3学年）
目	標	外国語を通じて言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。	外国語を通じて言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成と聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどの <u>コミュニケーション能力を総合的・統合的に養う。</u>
内	容	ア 強勢、イントネーションなど、基本的な英語の音声の特徴に慣れ、身の回りの語彙や場面の中での表現を聞き取ること。 イ 話し手の英語の強く言われる語や、ジェスチャーなどを手がかりにして内容を推測して聞くこと。 ウ 質問や依頼などを聞いて、英語や状況から判断し、応じること。 エ 分かったことを反復したり、分からないことを聞き返したりして話し手の意向を理解しようとする事。	ア 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、正しく聞き取ること。 イ 自然な口調で話されたり読まれたりする英語を聞いて、情報を正確に聞き取ること。 ウ 質問や依頼などを聞いて適切に応じること。 エ 話し手に聞き返すなどして内容を確認しながら理解すること。 オ まとまりのある英語を聞いて、概要や要点を適切に聞き取ること。
	容	ア 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえて聞いたままに発音すること。 イ 自分の考えや気持ち、事実などを英語やジェスチャーなどを使って、聞き手が分かるように伝えること。 ウ 聞かれたことについて、簡単な英語で反応したり、問答し合ったりすること。 エ 相づちを打ったり、反応したりしてコミュニケーションを続けようとする事。	ア 強勢、イントネーション、区切りなど基本的な英語の音声の特徴をとらえ、 <u>適切な情報伝達が行えるよう、正確に</u> 発音すること。 イ 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。 ウ 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること。 エ つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。 オ 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。
内	容	ア アルファベットを認識し、読むこと。 イ アルファベット文字の音をつないで、身近な語彙を読むこと。 ウ 身の回りの簡単な単語や文を読んで理解すること。	ア 文字や符号を識別し、正しく読むこと。 イ 書かれた内容を考えながら黙読したり、その内容が表現されるように音読したりすること。 ウ 物語のあらすじや説明文の大切な部分などを正確に読み取ること。 エ 伝言や手紙などの文章から書き手の意向を理解し、適切に応じること。 オ 話の内容や書き手の意見などに対して感想を述べたり、賛否やその理由を示したりなどすることができるよう、書かれた内容や考え方などをとらえること。
	(1) 言語活動	ア アルファベットを正しく書くこと。 イ 身の回りの簡単な語や文を、文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書き写すこと。 ウ 例文を見ながら、語彙を選んで自分の考えや気持ちを書くこと。	ア 文字や符号を識別し、語と語の区切りなどに注意して正しく書くこと。 イ 語と語のつながりなどに注意して正しく文を書くこと。 ウ 聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりなどすること。 エ 身近な場面における出来事や体験したことなどについて、自分の考えや気持ちなどを書くこと。 オ 自分の考えや気持ちなどが読み手に正しく伝わるように、文と文のつながりなどに注意して文章を書くこと。

- ・第3学年からは、音声を中心とした活動を行うとともに、音声と文字を関連付けた活動を取り入れ、「読むこと」や「書くこと」を系統的に指導した。
- ・後期では、第6学年から第9学年（中3）において、上級学年から学習内容の一部を取り入れて、学習内容を4領域の言語活動の観点から整理した。
- ・前期・後期を通して「地域発信型単元」を設定し、教科や総合的な学習の時間などの既習の学習内容と関連させながら、地域をテーマに発信する言語活動を行った。

③ 3つの視点に基づいた単元構成

児童・生徒にどんな力を育成するかを明確にして学習内容を単元化するために、大きく3つの視点（Communication: Basic, Communication: Trial, Communication: Expansion）から単元を設定した。

【「外国語」（前期）と「外国語」（後期）のつながり】



- **Communication: Basic** では、児童・生徒の日常生活の中から題材を取り上げて、その題材ごとに、音声・リズム・イントネーションを意識した基礎的な語彙や表現の定着、また、互いの思いを伝え合おうとする態度の育成が図れるように指導した。
- **Communication: Trial** では、学習課題に向かって児童・生徒自身の「こうしたい」、「これを伝えたい」という思いをもとに、自分の思いを表現する言語活動の過程で、英語を運用する力を高めたり、新たな表現を習得しながら学びを深めたりするように単元を構成して指導した。また、言語活動の途中です入れる中間評価の場面や異学年交流など、学び合う場を広げた。
- **Communication: Expansion** では、「地域発信型単元」を通して、児童・生徒が自分たちの生活や文化、地域をテーマに、実際に英語で受信・発信する学習を行うこととした。そのため、県内外からのALTとの交流（Meet the World）、外国の交流校とのスカイプなどを使った交流、ビデオレター・メールなどの表現物を送り合う交流など、直接交流や間接交流を組み込んだ。
前期では、生活科や総合的な学習の時間における「ふるさと学習」で学んだ内容を中心に、後期では、観光・自然・伝統・地域などの課題を設定し、英語で情報収集し、思考し、発信する学習を行った。その際、生徒の伝達欲求に応じて高校段階での学習内容の一部を取り入れた。

④ 指導方法

- 特に前期では、音声や基本表現への慣れ親しみを重視し、英語の音声やリズム、イントネーションを感じ取る活動、ひとかたまりの英語を聞いて、キーワードや状況から何が話されているかを類推する活動などを多く取り入れた。
- 英語の文字が自然と目に触れられるように表示や掲示など校内環境を整え、第3学年ではアルファベットの認識、第4学年ではアルファベットの音素への気付きやそれをつないで読む学習、第5学年では音声で言えるようになった英文を読む学習を取り入れた。
- 小学校第6学年の教科書を使った「リンクプログラム」では、第7学年（中1）で使用する教科書の冒頭3課分を言語活動と関連させて読んだり、辞書のように語彙や表現、綴りを調べたりする

際、活用した。第7学年（中1）では、4技能を総合的に扱いながら、第6学年での学習内容を基に「言葉の仕組み」から既習事項を整理するとともに、中学校での学習方法を学ばせてから、本格的に中学校の学習内容をスタートさせた。

- 中学校では、授業内における教師と生徒の英語の使用頻度を増やし、特に、第8学年（中2）からは、できるだけ英語で授業を行い、生徒の発話を増やすようにした。また、4技能を統合的に使って、聞いたり読んだりした内容について自分の意見を述べたり書いたりして相手に伝えるなどの活動を多く取り入れた。
- 高等学校への接続の観点から、生徒同士で「受信」と「発信」が行えるように、ディベートやオーラルプレゼンテーションなどの学習活動を適宜取り入れた。

⑤ 教材

- **Review Sheet**（单元ごとのまとめシート）・**Reading Book**（单元で使用した会話表現）
「外国語」（前期）では、**Review Sheet**を教科書に代わるものとして使用した。第5学年では、後期との連携を考慮し、音声で行った会話を文字化したものを使い、单元末に音読（模擬リーディング）することで音声と文字をつないだ。
- **Sunshine Book 1,2,3**（中学校用教科書）・**Power On I**（高等学校用教科書）
「外国語」（後期）の第6学年では、音声による言語活動後に、学習内容を整理するものとして、また、英語表現を調べる辞書的なものとして第7学年（中1）の教科書を活用した。同様に第9学年（中3）でも高等学校用教科書を活用するなど、第7～9学年（中1～中3）では、必要に応じて上学年の教科書を使用した。

⑥ 評価方法

- 小・中学校ともに次の観点から評価した。

【英語活動】 第1・2学年	【外国語】 第3学年～第9学年（中3）
・コミュニケーションへの関心・意欲・態度	・コミュニケーションへの関心・意欲・態度
・外国語への慣れ親しみ	・外国語理解の能力 ・外国語表現の能力
・言語や文化についての気付き	・言語や文化についての知識・理解

- 各单元において、児童生徒に身に付けさせたい「評価規準」と、それをどの程度まで習得しているかを判断するための「判断基準」（全員が到達してほしい基準としてB判定のみを示したもの）を設定した。それぞれの单元を通して児童生徒にどのような力を身に付けさせればよいのか、そのためにどのような具体的な支援が必要なのかを共通理解した。
- 評価方法として、発達段階に合わせて、言語活動への取組の様子や発表・面接・小テスト、外部客観調査（英語検定など）などによる評価を取り入れた。
- 小学校では、観点別評価を行い、それをもとに評定に至るシミュレーションを行った。

(2) 研究の経過

第一年次	<p>理論研究とともに、仮説に基づく実践を開始し、実践の中から研究の方向性を定めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・理論研究や実態調査、先進校視察等により教育課程や指導の在り方を探った。 ・中学校卒業時の姿を想定し、直島小・中学校外国語学習指導指針を作成した。 ・これまでのカリキュラムを、单元構成の類型とそのねらい、小中連携等から見直し、その学習内容を「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4つの言語活動の観点から、系統立て、一部試行した。 ・地域発信型单元を小中学校に位置付け、それぞれに試行した。 ・文字の指導計画を作成し、一部試行した。 ・ねらいに基づく評価の観点、各单元における評価規準を作成し、一部試行した。 ・これまでの教員研修をもとに「教員研修プラン」を作成して、実践した。
------	--

<p>第二年次</p>	<p>一年次の実践を見直し、ねらいに沿った教育課程や指導方法を実践研究した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前期、後期の新カリキュラム（Communication : Basic, Communication : Trial, Communication : Expansionの単元構成）に基づいて実践する中で、その課題と問題点を探り、カリキュラムの改善を図った。 ・評価の観点、評価規準に基づき、児童生徒の意欲化を図るように評価を行い、その有効性を検討した。 ・他教科や総合的な学習の時間との関連を図りながら「地域発信型単元」の資料を整理した。 ・第一年次の教員研修を改善して、第二年次の教員研修を行った。 ・研究中間発表会を開催した。（H24. 11. 2）。
<p>第三年次</p>	<p>実践内容の改善を図りながら、これまでの研究の成果と課題をまとめた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第二年次の改善案を実践する中で、問題点等を探り、実践内容の改善を図った。 ・「英語活動」及び「外国語」の指導案集、前期のReview Sheet、教員研修プランをまとめた。 ・これまでの実践や意識調査、実技テスト、外部客観調査等から、研究の成果と課題をまとめた。 ・研究授業の公開（ホームページ上にも掲載）、県内外の研修会での発表等を通して研究成果を公開した。

(3) 評価に関する取組

<p>第一年次</p>	<p>主に研究の方向性、計画などから評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究の計画や手順、「外国語カリキュラム試案」「教員研修プラン」について運営指導委員からの指導をもとに、研究の方向として妥当であるかについて推進委員会で検討した。 ・7月、12月に児童生徒・教員・保護者を対象に意識調査をし、取組への意欲を考察した。 ・7月に児童生徒（小3～中1）を対象に、コミュニケーション実技テストを行い、考察した。 ・10月に小5・小6を対象に児童英検、中学生に英語検定等、中1・中2を対象に香川県学習状況調査、2月に中1・中2を対象にCRT等の調査を行い、客観的な英語力を測った。
<p>第二年次</p>	<p>主に教育課程から評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7月、12月に、児童・生徒・教員・保護者を対象に意識調査をし、外国語学習への意欲の変化を考察した。 ・7月に児童生徒（小3～中2）を対象に、コミュニケーション実技テストを行った。 ・9月に小3～小6を対象に外国語活動対応テスト、10月に小5～小6を対象に児童英検を実施し客観的な英語力を測った。 ・10月に中1～中3を対象に英語検定、11月に中1・中2を対象に香川県学習状況調査、2月に中1・中2を対象にCRT等の調査を行い、英語力の変容を考察した。 ・研究授業公開や研究中間発表会を開き、運営指導委員や広く外部からの客観的意見をもらい研究の改善に生かした。
<p>第三年次</p>	<p>主に児童や生徒等に表れた成果や課題から評価した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業中における児童生徒の学習の様子や、児童生徒・教員・保護者を対象にした意識調査（7月・12月に実施）から、取組への意欲の変化を考察した。 ・9月に児童生徒（小3～中3）を対象に、コミュニケーション実技テストを行い、理解力・表現力・コミュニケーションを継続しようとする積極的な態度を調査した。 ・10月に小3～小6を対象に児童英検を実施し、客観的な英語力を測るとともに、英語力の変容を調査した。中1～中3生徒を対象に英語検定、11月に中1・中2を対象に香川県学習状況調査2月に中1・中2を対象にCRT等の調査を行い、英語力の変容を考察した。 ・Meet the World（11月）で、ALTが中3生徒のコミュニケーション能力を評価し、考察した。 ・研究授業公開や県内外研修会での発表等を通して、運営指導委員や広く外部からの客観的意見をもらい、研究のまとめに生かした。 ・研究の経過の記録や客観的な分析により、研究そのものについて評価した。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 児童・生徒の情意面での効果

○ 児童の英語を学習することに対する肯定感が高い。

- ・児童へのアンケート調査から、全校生の97.2% (H23年度), 98.2% (H24年度), 95.5% (H25年度)が外国語の学習を「とても楽しい」、または「楽しい」と肯定的に捉えている。授業の様子からも、児童が外国語学習に興味や関心をもって取り組んでいることが分かる。そのアンケートの中で、「とても楽しい」と感じている児童の割合が、53.5% (H23年度) から80.7% (H24年度), 79.3% (H25年度)に増えた。授業中、「できる」「分かる」という声が聞かれたり、積極的にコミュニケーションを図ろうとしたりしている様子などが見られる。教科化したことで、児童の理解力や表現力が高まり、学習意欲が向上していると考ええる。
- ・児童の97.2%が「外国語の授業が自分にとってとても大事」「どちらかと言えばそう思う」と考えており、「外国語の授業が自分にとってとても大事」と答えている児童は、79.6% (H23年度) から89.9% (H25年度)に上昇した。
- ・第3学年の英語を学習することに対する肯定感は100%であり、依然として高い。

○ 生徒の英語を学習することに対する肯定感も高い。

- ・生徒へのアンケートから、全校生の90.3% (H25年度11月)が外国語を学習することを「好き」「どちらかと言えば好き」と答えている。平成25年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査における全国53.0%、香川県44.4%と比較しても、英語を学習することに対する肯定感は非常に高い。
- ・生徒の72.0%が「将来、外国へ留学したり、国際的な仕事に就いたりしてみたいと思う」「どちらかと言えばそう思う」と考えているが、「将来、外国へ留学したり、国際的な仕事に就いたりしてみたい」と答えている生徒は、62.5%(H23年度)から72.7%(H25年度)に上昇した。また、平成25年度全国学力・学習状況調査の質問紙調査における全国(29.9%)と比較しても極めて高く、国際感覚の育成につながっている。

○ 第7学年(中1)で、英語を学習することへの肯定感が一時下がるが、その後回復、上昇している。

- ・教科として、小中の学びの連続性を図ろうとしているが、第7学年(中1)では授業時数や学習内容の増加により、情意面での下降が見られる。しかし、徐々に中学校の学習方法に慣れたり、実際に英語でのやりとりを行う学習を積み重ねたりすることにより、英語を学習することを「好き」「どちらかと言えば好き」と答える生徒は、81.8%(第7学年:中1), 93.1%(第8学年:中2), 96.0%(第9学年:中3)と学年が進行するにつれて、再び増加している。
- ・中学校では、全学年で年間160時間の授業時数を設定することにより、全校生徒の92.2% (H25年度11月)が「毎日英語を学習することで、自分の英語の力がついていと思う」と感じている。英語を毎日学習することで、理解力・表現力を身に付け、さらに英語学習への自信を高めることが、肯定感の回復・上昇を後押ししていると考ええる。

② 小学生の「読むこと」「書くこと」における効果

○ アルファベット文字のもつ音を、フォニックスチャンツで口ずさむことで、母音や子音が持つ音を意識することができた。

○ 第4学年頃から英語の音韻認識能力が高まってくる。

- ・3つの単語を聞いて、その音を頼りに最初の文字を選ぶことで、アルファベットの音と文字のつながりがどの程度理解できているか(全学年で同じ問題を10問)を調査した。H23~H24年度まで、「音と文字をつなぐ言語活動」を意識的に取り入れている第4学年以上の児童は、平均9.5文字の正答数であり、より確かな定着が見られる。

○ アルファベット文字を書くことに関心を持ち、文字の読み書きに慣れてきた。

- ・第6学年でアルファベットの小文字を書く調査の平均正答数は、文字に触れる機会がなかった平成23年度は、平均22語、第5学年時に少し文字に触れた平成24年度は、平均24.7語、第4・5学年時に文字に触れた平成25年度は、25.8語であった。平成25年度の第6学年が第3学年時には、平均11語であり、段階を追って、アルファベット文字を学んできた児童からは、帯活動の中で、継

続的に学んだことがよい成果につながったものではないかとする声が聞かれる。

- **自分で文字を見て読んだり、聞いた音声を文字に書き表したりする姿が見られる。**
 - ・授業中に提示された文字を見て、児童が積極的に読もうとする姿が見られる。初めて見る単語を自分で読んでみようとしたり、文字を見ながら発音したりすることにも抵抗感なく取り組んでいる。
- **92.9%の第5・6学年が、「文字を使って学習することをよい」とし、表現する内容量が増えるにつれて、文字を必要とする傾向が見られる。**

③ 「外国語理解の能力」・「外国語表現の能力」における効果
(小学校段階)

- **客観的な調査（「児童英検 BRONZE,SILVER」を使用）で、全体的に全国平均より高い。**
 - ・第3・4学年の BRONZE では、「語句」「会話」においては4～7点、第5・6学年の SILVER では、「語句」「会話」「文字」の分野において5～8点全国平均を上回っている。特に「3つのヒントを聞き、内容に合った絵を選ぶ問題」（97%）や「1つの語を聞き、それに合った文字を選ぶ」（96%）などは正答率が高かった。
- **第6学年の SILVER の素点分布では、ばらつきが小さく、高得点に集まっている。**
 - ・学年内での正答率の分布のばらつきを見ると、BRONZE では、第3学年（77～97点）、第4学年（82～97点）、SILVER では、第5学年（69～98点）、第6学年（81～100点）であった。第3学年より第4学年、第5学年より第6学年が正答率のばらつきが小さく、次第に理解を深めていることが分かる。
 - ・第6学年の SILVER における正答率のばらつきの変化を見ると、H19年度（56～98点）、H23年度（67～94点）、H25年度（81～100点）と、次第に80点以上にばらつきが集まってきている。教科として児童全員が無理なく学習を進め、ペアやグループなどによる交流を通して学び合うことで互いの力を高めていることの結果だと言える。

(中学校段階)

- **第9学年（中3）の60.0%が英語検定3級・準2級を取得している。**
 - ・第9学年（中3）における英語検定3級・準2級の受検率は68.0%、そのうち3級・準2級の合格率（H25年度）は60.0%であり、全国平均16.2%（平成24年度「『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』に係る状況調査」）に比べて極めて高い。
- **標準学力検査(CRT)において、すべての観点で全国平均を大きく上回っている。**
 - ・第7・8学年（中1・2）における標準学力検査(CRT)において、「外国語表現」の観点で平均21ポイント、「外国語理解」と「知識・理解」の観点で平均16ポイント全国平均を上回っている。
- **「特定の課題に関する調査 —英語— 書くことに関する調査」（国立教育政策研究所、2010）と同内容の調査において、すべての問題で全国正答率を上回り、無解答の生徒がいない。**
 - ・「友達を紹介する英文を書く」では76.0%（全国48.0%）、「外国人に日本の夏と冬のどちらをすすめるか書く」では80.0%（全国38.2%）など、まとまりのある英文を書く問題において特に全国平均正答率を大きく上回っている。また、無解答の生徒がいないことから、間違いを恐れず表現しようとする意欲が高いと考えられる。

④ 「地域発信型単元」の指導効果

- **「地域発信型単元」では、使用する語彙や表現が幅広いため、児童生徒は「表現することは難しいが、英語の力が身に付く」と感じている。**
 - ・直接間接を問わず、外国の人々とコミュニケーションを図ることは、全体的に楽しいと感じている。しかし、第7学年（中1）においては「楽しい」と感じる割合がやや低下する。これは、「緊張する」「言いたいことが言えない」などの理由が多く、自分の伝えたいことと英語力のギャップを感じていると考える。
 - ・第8・9学年（中2・3）では、100%の生徒が「地域発信型単元は楽しい」「地域発信型単元は英語の力が身に付く」と感じている。地域の良さを外国人に発信する場面を設定することで、より地域の良さを認識することができるとともに、自国や郷土の文化に誇りを持ち、英語で理解したり表現したりしようとする意欲の向上につながっていると考える。

⑤ 外部参観者から見た児童・生徒への効果

○ 多くの参観者から児童・生徒のコミュニケーション能力が向上しているという声が聞かれた。

- ・研究開発第2年次発表会（H24年度実施）や毎年実施している Meet the World を参観した多くの保護者や県内外の ALT から、「子供たちが生き生きとして英語に慣れ親しんでいる」、「中学生の表現意欲や英語の力が高い」「中3の生徒は自分が教えている高校生と同レベル、あるいはそれ以上である」という感想をもらい、児童・生徒のコミュニケーション能力が高まってきていることを確認できた。

⑥ 教員への効果

○ 定期的に3つの研修を行うことが、指導法の確立や教員の研究意欲の継続につながった

- ・Plan 研修（単元計画作成や教材準備）や Pre 研修（研究授業の模擬授業を通して指導方法や教材の有効性を学ぶ）など、教員研修のねらいをはっきりさせて取り組んだことで、児童・生徒の実態に沿った各学年の単元を構成する力が高まってきた。
- ・全員が研究授業を行い、意欲的に指導した。研究1年次は、「文字の扱い方」や「4技能の統合的な言語活動の在り方」など、カリキュラム作成上の課題を解決するための授業を、研究2年次は、3つの単元構成によって「児童・生徒に育成したい力」を共通理解するための授業を、3年次は、研究の課題の成果を見取る授業を行った。そのことで、指導方法について共通理解し、指導力向上に努めるようになった。

○ 小中の研究授業を通して、発達段階に応じた指導法の工夫や児童・生徒理解が深まった。

- ・小中学校相互の研究授業を参観・討議したり、カリキュラムや発達段階に応じた指導法の工夫を把握したりすることで、相互理解が深まった。中学校では、外国語の授業を参観することを通して、教科を越えて「言語活動」「生徒理解」という視点での教員間の連携強化につながった。

○ 他教科や領域と関連させた単元構成力と実践力が高まった。

- ・既習事項が生かされるように言語活動を組むなど、他教科や領域との関連を図る単元構成力がついてきた。特に「地域発信型単元」では、児童・生徒の既習事項（社会科、生活科、総合的な学習の時間）などと関連させて単元を構成し、児童・生徒の表現意欲を引き出す実践力も高まってきた。

○ 教員の英語力や授業力向上への意欲が高まった。

- ・小学校では、外国語の指導や Meet the World などの学校行事を通して、教員自身が英語に慣れ親しみ、自信を高めている。英語を使う機会が増えるにつれて、英語力向上の必要性を感じ、さらなる研修への意欲につながっている。
- ・中学校では、授業を公開する機会が増え、学習指導案の検討会等を行い、授業力を向上するための研修が授業改善へとつながった。

⑦ 保護者への効果

○ 英語を学習することへの期待が高まっている。

- ・外国語学習の授業参観では、多数の保護者が参観している。7月に実施した保護者アンケートでは、H24・25年度ともに、「小学校で英語の学習をすること」について、保護者の100%が賛成であると答えている。「英語を学習することは児童にとって必要である」と考え、大きく期待していることが分かる。

○ 多くの保護者が子どもに英語の力が付いてきたと考えている。

- ・Meet the World を参観した後、平成24年度には94.7%（保護者アンケート回答者38名中）が、平成25年度には88.0%（保護者アンケート回答者50名中）が、「子どもに英語の力が付いてきている」と肯定的に捉えていた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 教科としての適切な授業時数について

- 小学校段階では、第3学年から教科として位置付けるには、学習内容の定着や評価・評定を行う上で、週1時間では十分とは言えない。

- 教科として適切な授業時数を検討する必要がある。
- ② 小学校段階における評定の在り方について
- 他教科における評定に対する子どもの様子から判断して、数値で評定してフィードバックすることは、児童の学習意欲の促進につながらないと考え。また、自分の姿を自分で評価できる自律的学習者の育成をめざしていることから、数値による評定を与えるより、絶対評価の結果なども参考にして自己評価できる児童を育てたいと考える。
 - 小規模校ではなく、比較体制のとれる大規模校で評価の在り方についての研究・検証を行っていくことが望まれる。
- ③ 小中接続部分の学習内容等の設定について
- 第6学年の終了段階で、自己表現、他者理解につながる英語力の習得をめざして「1人称・2人称を主語とした現在形でのやりとりができるレベル」と考え、実践してきた。しかし、このことが適切であるかどうかは、今後も研究が必要である。
 - 小学校段階に、中学校の学習内容をどの程度移行するかについては、今後も検討していく必要がある。同時に、中学校段階でも、上学年や高等学校学習指導要領からどの学習内容を移行していくかについても、今後の検討課題である。
- ④ 英語による授業における生徒の理解度・定着度の検証について
- 第8学年(中2)からは、できるだけ英語で授業を行い、生徒の英語使用を増やすようにしたが、全員が理解することは難しい。直島中学校を卒業した高校1年生へのアンケート調査(H25年7月実施)から、高等学校で「教師が英語で授業を進めてもだいたい理解できる」と答えた生徒は、他中学校卒業生が34.0%であるのに対して60.0%と高い数値を示しているが、あとの40.0%の生徒は、十分理解できていないということが分かった。
 - 場面によっては、日本語指導も効果的に取り入れることが必要である。
 - 英語で授業を進めることで、生徒がどの程度まで授業内容を理解できているかを検証する必要がある。
- ⑤ 教員研修について
- 教師の多くが、教員自身の英語運用力を課題と考えている。
 - 小学校段階においては、English Timeや学校放送等、英語に触れる機会を学校全体として継続実施し、教師も児童と一緒に学ぶという姿勢を大切にしたい。
 - 高学年の授業では、児童の表現欲求に答えるためには専科教員による授業が今後も望まれる。
 - 教師が進んで研修会等へ参加することにより、さらに生徒の英語使用を増やす指導力や英語力の向上が求められる。